

第8回 4度堆積①

前回までの講義にて、コード&スケール、基本Blues、アプローチハーモナイズなどの、3度堆積を基にしたほぼ全ての知識は習得しています。今回から講義する4度堆積は、全く違う世界のサウンドです。通常システムでは得られないサウンドキャラクターは、1960～1970年代のプロGRESSIV・ロック、フュージョン等で多用されてきました。2017年現在からしてみれば、すでに懐古趣味的な「レトロフューチャー」なサウンドに聞こえるかもしれません。しかし、「サウンドは時を経て輪廻する」こともまた真理です。4度堆積はまた、形を変えて最機運の高まりを予感させるには、十分に魅力的なサウンドであることは間違いなさそうです。

通常の音楽システムと、構造が違うことではBluesシステムと共通していますが、根幹の成り立ち自体が異なっていることに注意が必要です。Bluesシステムは通常システムとの自由な融合が可能でしたが、4度堆積はサウンドのあまりの特異性から融合が難しくなります。4度堆積サウンドを1曲を通して続けきるか、イントロや、リフ、間奏などの一部で飛び道具的に使うなど、その用法にはサウンドセンスが問われることになるでしょう。

また、別のサウンドアプローチとして、3度堆積からの変形で擬似的4度堆積サウンドを得ることにより、合理的に通常システムに取り込んでいくこともできます。こちら順を追って説明します。

P4th Interval build

例えば「C」からP4で音を積み重ねていくと次のような和音になります。



重ねる音の数で次のように和音を表記します。

C4.2 C4.3 C4.4 C4.5 C4.6 C4.7

そもそも、4度堆積にはコード表記のルールがありません。このコード表記法も一般的ではないので、使用には説明が必要です。ちなみに、他に「Cq2」「Cq3」と、表記する方法をとる音楽家もいます。

4度堆積サウンドで重要なことは、3度堆積サウンドとの差異を明確にするため、「**4度の音の重なり=P4パーツ**」にとことんこだわって使用することです。

4度堆積サウンドをコード&スケールシステムに流入させる

例えば「C4.4」を取り上げてみましょう。この和音をInversionを用いて再構築すると、「Cm7(11)」と3度堆積のコード表記ができることがわかります。

Cm7(11)対応スケールの一つである「C_Dorian」を取り上げてみましょう。「C_Dorian」構成音から「P4パーツ」を探してみます。

全体的なコードはC4.4を中心に、上部和音でG4.3、A4.3を混ぜ込み、メロディは各P4部分をアルペジオで構築してみます。DorianサウンドがP4パーツにて効果的な4度堆積サウンドに昇華します。特にメロディのP4部分を「4.3」単位で確認してみてください。

[3-8 Etude1]

4度堆積コードからスケールを考察する

C4.4構成音を「C」ルートからインターバルで見ると「11th」「m7」「m3」となります。Dorian以外にもPhrygian、Aeolian、Locrian、Dorian ♭2、Altered Dorian、が対応できます。これらは逆の味方をすると、構成音インターバルで「M3」「#11」「M7」を含まないスケールです。C4.4にて、これらスケールが重ね合わせ状態であると見てみます。すると、「4.3」基準でP4パーツを考察してみると、

C4.3 C#4.3 D4.3 E♭4.3 E4.3 F4.3 F#4.3 G4.3 A♭4.3 A4.3 B♭4.3 B4.3

これらのP4パーツはクロマチックアプローチとして任意に使える

使えるP4パーツが大幅に増えます。また、使えないパーツも「クロマチックアプローチ」にて、その他のパーツへ解決することで使用可能です。これらを踏まえてもう一度C4.4から4度堆積サウンドを構築します。

[3-8 Etude2]